

近年、生活習慣病の一つとして捉えられている歯の疾患に酸蝕症があります。かつて、酸蝕症は、酸などを扱うメッキ工場などで働く人が罹患する限局的な歯の疾患でした。しかしながら、現代では、誰もが罹患する可能性を持ちうる疾患となってきました。酸蝕症は、口の外から入ってきた「酸」や身体



菅 俊行 講師



徳島大学病院むし歯科

の中からの「酸（胃液）」によって歯が溶ける病気で、細菌が産生した酸により歯が溶ける虫歯とは区別されています。

酸蝕症の増加の原因としては、清涼飲料水、柑橘類などの酸性飲料や酸性食品、並びに健康増進のために服用する酢やビタミン剤などのサプリメントの摂取量の増加による外的原因と、拒食症や逆流性食道炎などによる胃酸の分泌といった内因的な原因があげられます。

一般に口の中がpH5.5以下の酸性状態となると歯の表面のエナメル質は溶けやすくなります。

のですが、通常は唾液が酸性状態を中和し、溶けた部分を修復する現象が起っています。そのため、酸性のものを口にしたからといって、すぐに酸蝕症になるわけではありません。しかしながら、日常生活の中で酸性飲料や酸性食品の過剰摂取により、口の中が酸性状態（pH5.5以下）になった状態が長く続くと、唾液による歯の修復機能が追い付かずに歯が溶けて酸蝕症を発症してしまいます。

酸蝕症 水がしみたら受診のサイン

それゆえ、酸蝕症

の予防としては、原因となる飲料・食品などを長時間口の中に入れて、摂取後は、水やお茶などの中性飲料ですすぎ洗いしておくことが好ましいとされています。

歯の溶解量が増え、エナメル質の下に存在する象牙質が口の中に露出します。象牙質には目に見えない小さな管が歯の神経へと通じており、そのため、冷たい水などがしみ、冷たい水などがしみ、象牙質知覚過敏症を引き起こします。

最初は一過性の痛みであるため、そのまま放置しておく方も多いのですが、長引くと、歯の神経が炎症を起こしてしまいます。ケースも多々あります。そうなる歯の神経を抜かないといけなくなるので、冷たい水がしみだしたら、早めの歯科医の受診をお勧めします。